20160522 〈ケア〉を考える会（第107回）

▼ケアにおける「専門性」――臨床における「専門性」というのは、事態の推移のなかでいつでも「専門性」を棚上げする用意があることだ‥‥。が、‥‥専門性を捨てる用意があるだけでなく、専門性を捨てなければならない。‥‥（そして）ある瞬間、脈絡を読み取ってぱっと（元の専門職に）戻れるというのがほんとうの意味での専門性ではないのか。

鷲田清一『老いの空白』ノート 「6 肯定と否定のはざまで」

▼老いゆく過程で、人は……「できなくなった」という事実をやむなく受け入れてゆく。‥‥。

老いとともに、ひとは人生を「できる」ことからではなく、「できない」こと‥‥から見据えることができるようになる‥‥。

何をするか‥‥というよりも、じぶんが何であるか‥‥という問い、さらには自分がここにいるということの意味への問いに、より差し迫ったかたちでさらされるようになる。

ひとの生を「する」ということを基準に考えるかぎり、老いるということはひたすら「する」世界が縮小してゆく過程をたどることだ

▼例えば極限的な身障者、‥‥そういう存在は‥‥結局「ある」ということなのです。「ある」こと自体が価値だということを示しているのです。　ところが「する」という眼差しから、この極限的な身障者を見たときには、全く価値がないということになってしまいます。（芹沢俊介著作より引用）。

▼べてるの家は、「ある」という視点から、「する」を基準とする社会を撃つ試みである。